

## 3. 金沢区の医学史—とくに明治初期の二人の村医と死亡診断書について

金沢区

松本 龍二

今年、金沢区が礪子区より分区して 50 年が経ち、金沢区医師会 50 周年記念誌を発刊することになった。私はその編集の一員となりました。私の生家が金沢でも古い家でしたので、明治・大正時代に金沢の医療に尽くされた医師を調査する役割をもった。

100 年以上も前の話なので、この土地に生まれながら子供の時の主治医の田中先生の家が代々医者の家であった位の記憶しかなく、その他に居たかも知れない医師の話は、祖父や父からも聞いたこともなく、又現在の医師会の先生も全く知らなかった。幸いなことに、昭和 62 年金沢区図書館発行の「金沢の 100 年」の本を読み、明治初期の各村の戸長（村長）、旧家、旧金沢藩主等の 15 家に保存されてあった古文書が横浜開港資料館に保管されてあることが分かった。そして明治 6 年から明治 16 年迄に書かれた 89 通の死亡届と 25 通の死亡診断書が見付かった。これにより明治初期には田中医師の他に宮川一宗氏が居たことが分かった。また隣接の礪子区杉田の間辺魯山氏が大きな役割をなされていた。その後の調べで田中氏は長崎で、宮川氏は京で蘭学を学んだ医師であり、間辺氏は千葉佐倉系の漢方医であることが判明した。

金沢の様な三方を山で囲まれた陸の孤島、寒漁村にかかる優秀な医学の先端に行く先輩を持ったことを誇りに思い、早く同僚の先生に知らせたく、昨秋今回発表の一部を金沢区医師会報 8 号に載せ、又一部を学術懇話会に発表した。今回の発表の中で、明治 6 年 9 月の死亡診断書は金沢区で一番古いもので、横浜市でも 1～2 番を争うものではないかと思われる。その他、死体検案書、二人の対診医による診断書、詳しく記載されている死亡届等、珍しいと思ったものを紹介した。

## 《特別講演》

先人たちは性医学をどう学んできたか

横浜市

斉藤 三朗

はじめに

古い時代の性医学は、性生活のノウハウ中心だった

わが国の「性生活ノウハウ」書は古くからの医書「医心方」に凝集されていたとされて言われているがこの書物が、一般人の目に触れたのは明治も終り 39 年の事で当時東京帝国大学の図書館地下に埋もれていたのを中国留学生の目に触れたのが初めて、当時の学者たちの手で出版が計画されたが、中止のハメに遭っている。「医心方」は 987 年当時の鍼

医丹波康頼が、中国から到来してきた多くの医書（82冊余）を編纂したとされた全30巻もので、その内の28巻が「房内部」。これには性生活のノウハウが記述されていたが、編者が宮廷に献上したことから長いあいだ、人々の日には触れなかった。

しかし「房内部」だけの抄録、和風に書き記した「性のノウハウ」が、巷には出回っていた。やがて18世紀には、貝原益軒が「養生訓」を刊行したことで「性生活ノウハウ」一度に注目されるようになってきた。

しかし、古医学や、儒教医学に批判的だった安藤昌益や、解剖下に実験医学を追及していた大矢尚斎らの熱意などが西欧の性医学の受容を急速におこなわせたと見てよい。

### 西欧の性医学の受容はヒポクラテス、ガレノスの「性医学」中心だった

杉田玄白の「解体新書」に引き継ぎ、欧州医学書のあいつぐ翻訳書の多くは漢方医や和蘭医たちに次第に受け入れられたといえよう。安政4年緒方洪庵が膨大なフーヘランドの翻訳「扶氏経験遺訓」刊行を契機に西欧の衛生学書の翻案が急がれたらしいも、そこで登場したのが辻恕介の「長生法」や松本良順・山城豊城の「養生法」であった。その基本姿勢はフーフランド医学の流れの継承だったものであった。

幕府政治が終焉して、明治維新の到来。緒方門下の優秀な弟子緒方准準が大阪医学校に招請したボードウインの泌尿器学講座は、それまで知りえた欧州医学の水準の高さを叙述にみせて性医学の受容におおいに貢献したものであった。「日講記聞 全11巻」の緒言に緒方洪庵の義弟緒方郁蔵が「従来の男女生殖器の内景官能病理治法未だ尽くさざるところありしに、方今とくに未曾有、故に先ずこの発明を講じて、後に他事に及ばんと……」とよせているように、顕微鏡、生化学的分析など、改めて解剖学、生理学や当時解明された分析学（生化学）などが詳細に記述されており医学生たち初め多くの読者を引きつけたといえよう。しかも「性衛生や、男子の生殖器の部」にはプルハーフェやフーヘランドなど欧州医学界の重鎮が説いた「性衛生学」であり、実は古いギリシャ医学のヒポクラテスや、ガレノスが説いた「性生理学、衛生学」を忠実に継承していたし、当時なお欧州を支配していた『オナニー』敵視論の源流であったチソーや、それらを道徳面から援護していたゲーテ、かれに心酔していたブルハーフェらや、ルソー等の「禁欲的性医学」が全面的に敷衍されていた。

フーフランドの出世作ともいえる「Mikroblotik」の翻訳抄録であった「長生法」の一節、房事の部には『嘗て一洋医の話しを聞くと、一度の房事は六オンスの瀉血と同じく、一度の手淫は、六度の房事と同じといえり。手淫の人身に害あること推して知るべし』せんずりこの一節こそブルハーフェが説いた「性の威嚇的警鐘」だとする説が最近アメリカの性社会学者、バーン&ポニー、プローによつて発表された。「売春の社会史」1991 \* 香川ら訳、筑摩書房刊。

その後、石黒忠恵の「長生法」、文部省翻案の「百科全書、養生編」、土岐頼徳の「啓蒙養生訓」など続いて刊行されたが、それらには「手淫害毒観」が姿をけしていった。明治5年に緒方准準の「衛生新論」には「性生理」とともに、性衛生と「手淫害悪論」が登場している。この中身は緒方洪庵の「扶氏経験遺訓」にあつたもので、本質はヒポクラテス、ガレノスの「性衛生論」そのものであった。

『手淫の害は過度の性交よりなを悪いものである。早晚必ず憂鬱病になるのである。一方婦人の男性にくらべれば色欲は弱いので、違ってきよう』など。

明治8年になって、千葉繁（横浜在住の士族という）の「造化機論、乾坤」が刊行された。著者はアメリカ人のゼームス・ストンとされている。本は最初は学術書の形態で樓蕃楼から出版され、扉絵には西洋美人の裸体画が彩色されていた。なかに精密な男女生殖器の石盤刷りの色彩豊かなものであった。しかし文面は医学用語中心であり医学書の形をとったもので、全国の医学書取次店に配送されていたことが書物奥付けで証明できよう。大衆向けにはそぐわなかったためか翌年には「通俗造化論」として言葉も改善したものを発刊、たちまち現在でいうベストセラーになっていった。

こうして性衛生の世間に広まった反映は、「房事養生鑑」なる一枚の絵草子紙にまでなり「食事養生鑑」とも一般家庭に普及したとされる。

「造化機論」を契機に、世間に「造化機論ブーム」の到来となり、明治30年代まで約25年間実に60余冊の類書が巷にあふれている。明治8年といえ、明治維新のながれに乗じた風俗墮落や猥褻見せ物等の流行が起り、出版条例が公布され多くの出版物が出版禁上にはなっていたが、造化機論類似出版書は発禁処分になったのは、明治13年『造化玉手箱』になってからである。アメリカ、イギリスものの翻訳があいつぐなかで、明治12年には、当時世間の自由民権運動の旗手であった、三宅虎太の翻訳『通俗男女自衛論』が世に出た。原著者はドイツ人レタウであり、全ページの3分の1もが「手淫害毒論」に費やされた本であった。明治12年前後には森鷗外に言わせれば「性欲抑制を巡る世相の見解は、賛否交互というばかりか、混乱の最中であつた」欧州の時代を最も反映したのが『通俗男女自衛論』であるといえよう。

しかしながら、かかる「通俗造化機論」の流行にたいして批判的な出版物もあつた。明治10年には早くも京都の名高い産婦人科医の賀川満斎が、『産科新式』を刊行した。当時の出版物の流行の一つだった、浮世絵のしかけ風のものまで挿入したものがあつた。

明治13年に出版禁止の一号になった『造化玉手箱』の禁止処分の理由がいまひとつ不明だが、巷の声ではこの本の対象者を女子向けにあつたようだ。

女性向けであつたように内容はいたって平易な表現で、重きを「性欲禁止と、手淫禁止、抑制」にはおいてなく、妊娠、産後の注意、交合一般論等が記述された。

明治半ばになると富国強兵の世相からすると「性、性欲」は社会の片隅に押しやられる

反面、学生への性犯罪、オナニー防止策など“国家的課題”とまでされた。

明治 38 年になって医学史研究家の富士川游が人性学会を結成して画期的な機関紙「人性」を刊行した。かれはドイツ留学中から性教育に強い関心を寄せていたが帰国後「性こそ学際的な協力下が必要」と説いていた。「人性」にはたちまち、民俗学者、歴史家、考古学者、哲学者、医師たちが結集してきた。

しかし、明治 44 年には、東京医科学会の名で『生殖作用男女の衛生』という小冊子が発行されて、世の大新聞などこぞって推薦文を掲載し、たちまちベストセラーになった。この中身はといえば東京帝国大学教授の面々が顔を連ねていた上、一斉に「性の陰惨、抑制」を叫んだもので、長与専斉（医務局長）、大沢謙二（公衆衛生）、土肥慶蔵（泌尿器）らが参加していた。

### おわりに\*

わが国の近代医学の受容のなかで、性医学はどうだったかを資料を中心にきて見てきた。残念なことに大きな流れはといえば、江戸時代にオランダ医学の受容とあいまって明治末期になるまで、わが国には「若者衆、若者宿」や、性への明るい民俗風習や生殖器崇拜など残っていたし、地方の民謡や、混浴などを見る限り本来「性にはおおらかさ」を持った世界に誇れる民族だった。それが、明治維新以降になり「性の隠蔽化」が加速されてきたといえるだろう。

性医学も、批判することなく欧州を渡倦してた「性抑制＝自慰病的視」論に依拠したものが中心的な役割を引き継いだもので、明治末までわが国を代表する東京帝国大学の教授さえが、この「威嚇的性衛生」（山本宣治：性教育）の旗ふりを勤めたことがわかってきた。

たまたま、性の解放または真の大衆化を訴えてきた人々は（森鷗外、宮武骸骨、小倉清三郎、山本宣治など）は、弾圧される側で、意見の公開すら制限されてきた。

二回の世界大戦中でも、従軍慰安婦の公認（軍人の性欲抑制への対応としての）から優生思想の追及に命をかけた永井潜の「性欲観」の源流もまた「威嚇的性衛生」によったものであろう（永井は、富士川の『人性』誌の最初から筆を奮い優性運動の官民一体化の道筋を歩んだ）。

### 参考文献\*

- 藤井 尚久。医学文化年表、日新書院、昭和 17 年  
 富士川 游。日本医学史、日新書院、昭和 16 年  
 阿知波 五郎。近代日本の医学、思文閣出版、1982 年  
 藤野 恒二郎。医学史話、菜根出版、昭和 59 年  
 山本 宣治。性教育、ロゴス書院、昭和 4 年。（以下 省略）